

## 序 思想と生

本書は、二十世紀フランスの思想家ジル・ドゥルーズ（一九二五—一九九五）における美学、批評、政治をめぐる、彼の映画論『シネマ』を中心に考える試みである。『シネマ』は二巻の大著であり——第一巻『シネマ1\*運動イメージ』（一九八三年）、第二巻『シネマ2\*時間イメージ』（一九八五年）——、そのなかで論じられている映画作家は数多く、その大半が今日でも重要と見なされている人たちだ。本書では、そのうちの何人かの作品や批評にふれながら、ドゥルーズが何を問題にしているのか、何が争点なのかを、『シネマ1・2』のあいだを行き来しつつ、再構成してゆく。

主に着目するのは、『シネマ』における知覚（第1章）、行動（第3章）、情動（第5章）、身体（第6章）、記憶（第7章）、言葉（第8章）である。さらに物語論（第2・3・4・6章）、俳優論（第3・6章）、ジェンダー論（第4・6章）、空間論（第4・5・7章）などにも焦点をあててゆく。いずれの章でも通奏低音になっているのは、ドゥルーズが映画批評において、いかに美学と政治を交差させているかという点だ。くわえて『シネマ』には、彼がそれ以前の著作で提出したアイデアが沢山

盛りこまれているため、彼のほかの著作につながりうる論点についても、いくつかふれてゆくことにしたい。

ドゥルーズの執筆した批評（映画論、文学論、絵画論）には、作品の側からやって来る声と、ドゥルーズの側からの解釈とのあいだのせめぎあいあらわれている。彼は抽象的な議論を振りかざすというよりむしろ、個々の具体的な作品にうながされながら、思考をつくりあげてゆく人だった。彼は作品の声をきちんと聴く人だ。そして同時に、練りあげられた思考が、当の作品の外にまで伸びてゆくように意図していたように思われる。啞然とするほど遠くまで行くことがあるのも、その魅力のひとつだ。そしてその遠くの地点から、ふたたび作品を見返してみよう読者を誘うのである。

ドゥルーズは『シネマ』の少しあとの時期のインタビューのなかで、自分は「概念」を、まるで小説のなかの魅惑的な作中人物のように、生きいきとした姿でとらえている、と述べたことがある。数学者も、数の世界をまるで手でふれられるような実在感をともなうて感知しているといわれるが、どうやら同じようなしかたで概念に向きあっていたようなのだ。彼はたとえばブルースト『失われた時を求めて』のシャルリュスのような、かなり癖の強い多面的で魅力的な作中人物の名前を挙げているが、哲学と出会ったところから、こうしたフィクション上の人物と同じように躍動する、概念の運動に心を弾ませていたという。もしかしたら彼にとって思考することは、概念とともに、不思議の国を冒険するような行為だったのかもしれない。

講義でも述べているのだが、彼は哲学書を小説のように読んでいたし、小説、絵画、映画を哲学書としても受容していた。だから、ある映画作家を、たとえば哲学者カントと同列で扱うことに何のためらいも見せない。「マンキーウィッツは映画ではなく、哲学書を書いたのだと想定してみよう……」などと、平気である。映画と哲学とをこれまでにないしかたで交又させた書物『シネ

マ』は、このような人物によつて書かれたのだった。ポルトガルの映画作家マノエル・ド・オリヴェイラは、ドゥルーズのうちに「哲学者」よりむしろ「詩人」の姿を見ていた。

彼はしゃがれた声で笑う、洒脱な人だった。セーターの色の好みも残された映像を見れば何となく分かる。ただ、個人的なエピソードを語ることを好まなかったため、自分の人生についてみずから語った言葉は、ごくわずかな断片しか伝えない。生い立ちと思想が結びつけられることに、強い警戒感を抱いていたのだ。

それにしても、みずから執筆したとおぼしき「伝記的指標」のなかに自身の「特徴」として、「ほとんど旅行しない。共産黨員だったことは一度もない。現象学者やハイデガー主義者であったことは一度もない。マルクスを放棄したことはない。六八年五月と縁を切ったことはない」と述べる、この思想家はいったい何者なのか。身体が弱くあまり外出を好まず、規則的に生活し、ある程度社交的ではあるものの孤独を深く愛し、肝心なところは謎につつまれたままの一人の思想家。その生涯をめぐるいくつかの事柄を、彼を取り巻く社会的・政治的な環境とあわせて、まずは見てゆくことにしよう。

### 幼少期から五〇年代まで

母オデット・カマユエルと父ルイ・ドゥルーズのあいだに、パリ第十七区で生まれたジル・ドゥルーズは、人生の大半をパリで過ごした都会人である。ドゥルーズが映画を見始めたのも幼少期のことで、「かなりよく映画館に行っていた」と本人が語っている。親の同伴なしで子どもに映画を見させる映画館があつて、その会員になつていたらしい。映画を見に行く子どもとして、その驚異に早くも魅せられていたようだ。

一九二五年生まれということは、隣国ドイツでの一九三三年のファシズム政権誕生、一九三六年のレオン・ブルムを首班とする人民戦線内閣の結成、徐々に地域と規模が拡大してゆくいくつもの戦争について、幼少期から十代にかけて身近で頻繁に見聞きしたということの意味する。ドイツ軍が一九四〇年にフランスへと侵攻したときには、フランス西部の海沿いの街ドーヴィルにいた。現地の寄宿舎に滞在し学校に通いながら、その後一年間を過ごすことになるのだが、ドーヴィルでは、「集合的記憶」論で知られるモーリス・アルヴァクスの息子、ピエール・アルヴァクスから文学の指南を受け、ボードレールやジッドを読んだという。本人いわく、それまでばつとしない少年だったとのことだが、アルヴァクスとの出会いはひとつの転機になった。

独仏が休戦協定を結んだのちパリに戻ると、リセ・カルノに進学する。当時リセ・カルノには、のちにコレージュ・ド・フランス教授になるモーリス・メルロー＝ポンティも教員として在籍していたが、ドゥルーズが受講したのはピエール・ヴィアルの哲学の授業だった。ドゥルーズが哲学に出会い、すぐさま魅了されたのはこのリセでのことだ。ヴィアルとは家が近所だったこともあり、学外でも交流があったという。

リセ・カルノでの学業を終えると、リセ・ルイ・ル・グランに移り、高等師範学校受験準備学級に進学する。高等師範学校の受験は、哲学の成績は良かったものの、ほかの科目の成績が芳しくなかったとのことで、結果として失敗することになった。ただし哲学の口頭試問の際に、科学認識論で著名なジョルジュ・カンギレムの目にとまり、奨学金を得てソルボンヌに進学する。ソルボンヌ時代の彼は、ドイツとの国境の街ストラスブルで行われていたカンギレムの講義にパリから通い、多大な影響を受けたと晩年に述懐している。

当時の大学教育では哲学史が重視され、ドゥルーズは「哲学史によって虐殺されたに等しい最後の

世代」だとすら述べている。ただし彼が、近代哲学の綿密な読み直しをとおして、新たな思考の練成を行う哲学史家でもあることに留意しておきたい。彼には、いわば新古典派的な顔があるのだ。くわえて若きドゥルーズは個人邸で開催されていた知識人や作家の集いにも足をはこび、ジョルジュ・バタイユ（思想家、作家）、ピエール・クロソウスキー（小説家、思想家、翻訳者、画家）、ジャック・ラカン（精神分析）、ブリス・パラン（言語思想、ゴダール『女と男のいる舗道』に出演）らと席することもあったようである。こうした地下の知識人たちの集いに若いドゥルーズを案内していたのは、のちに博士論文『差異と反復』の指導教授となるモーリス・ド・ガンディヤックだ。後年になると、今度はドゥルーズのほうが彼を、トランスジェンダーたちの集うナイト・クラブに連れて行っていたという。

まだ二十歳になるかならないかの若きドゥルーズが出入りしていた場所に集っていた人たちの名前を眺めるだけで、パリの知識人ネットワークの広がりや密度が見えてくる。なかでもジャン・ヴァール『英米の多元論哲学』（一九二〇年）への評価は一貫してきわめて高く、その影響はドゥルーズの著作のなかに初期から晩年まで垣間見られるものだ（経験論、多元論、関係の理論、多様体論など）。ドゥルーズが英米哲学・文学に強い関心を抱くようになるきっかけのひとつは、おそらくヴァールによるものだ。またマルシアル・ゲルが哲学者の思考を構造的に把握し、ひとつのシステムとして緻密に再構成してゆくしかたは、ドゥルーズに強い印象を残しているし、ガストン・バシユールの認識論と詩学が、一九七〇年代半ば以降のドゥルーズとガタリの生成変化論のなかに足跡を残していることも見逃すことはできない。

学生時代までに知りあっていた同年代の友人・知人には、のちにパリ第八大学で同僚となる哲学史家フランソワ・シャトレ、小説『フライデーあるいは太平洋の冥界』の序文をドゥルーズが執筆する

ことになる作家ミシェル・トゥルニエ、『シヨア』を監督するクロード・ランズマンなどがある。なかでもリセ・カルノの同級生であるトゥルニエは、住んでいたホテルがドゥルーズと同じで——セーヌ河に浮かぶサン・ルイ島の「平和ホテル」——、頻繁に集まるグループを結成していた。高名な作曲家・指揮者となるピエール・ブーレーズも同じホテルに住んでいたという。なお、ミシェル・フーコーと出会うのは一九六二年、共著を執筆するフェリックス・ガタリは一九六九年である。

初の単著を出版したのは一九五三年（二十八歳）。イギリス経験論を代表する哲学者デイヴィッド・ヒュームを論じた『経験論と主体性』だ。つぎの単著は一九六二年、フランスにおけるニーチェの何度目かの流行にも寄与したとされる『ニーチェと哲学』である。六二年以降、六〇年代のドゥルーズはほぼ毎年のように著作を発表するのだが、そのまえの一九五三年から一九六二年のあいだ、ドゥルーズは著作を出版していない。みずから「空白の八年間」と呼ぶ時期だ。とはいえ、この間に重要な論文を発表し——ベルクソン、ニーチェ、マゾッホ、ルクレティウスについて——、テクスト選集『本能と制度』（一九五三年）、ベルクソン選集『記憶と生』（一九五七年）を編纂している。くわえてドゥルーズは、一九五七—六〇年のあいだソルボンヌで助手をしながら講義をしていた。その講義の記録として、ライブニッツ、ヒューム、ルソー、カント、ベルクソンをめぐるタイプ原稿が残されている。

私生活では、一九五六年にファニー・グランジュワンと結婚。彼女は服飾デザイナーのピエール・バルマンのもとで働いていた人で、ドゥルーズの著作では「ファニー」と呼ばれる。プレイヤード版のルイス・キャロル全集の翻訳に参加するほど英語に堪能で、ドゥルーズのキャロル論にも協力したことが推察される。またD・H・ロレンス『黙示録論』フランス語訳（一九七八年）は、ドゥルーズとの共同名義で刊行したものだ。二人のあいだに生まれた息子ジュリアンはのちにT・E・ロレンス

『知恵の七柱』の翻訳者となり、娘エミリーは映画作家となる。なお、ファニーもジルも健啖家にはほど遠かった。

## 戦争前後

ドゥルーズの通っていたドイツ占領下のリセは、政治と切り離すことのできない環境だった。ドイツ軍は司令官が暗殺されたことへの見せしめ的な報復として、一九四一年十月、フランス人を五十人近く銃殺した。その犠牲者の一人であるギイ・モケは、ドゥルーズの同級生で、彼の死の報せは学校にすぐさま伝わり、大きな衝撃をもって受けとめられたという。また、自身の兄ジョルジュ・ドゥルーズも、ドイツ軍に逮捕され収容所に送られる列車のなかで亡くなった。ただし兄についてドゥルーズが公の場で語ることはなく、個人的な会話でもあまりふれなかったようだ。様々な理由が推測されているが、本人が語らなかった以上、その理由は明らかではない。占領下フランスの抵抗運動<sup>レジスタンス</sup>についていえることがあるとすれば、ドゥルーズが誇大視も、偶像化もしなかったということだ。

戦後になっても、彼の世代の知識人にはめずらしいことに、レジスタンスで名声を高めた共産党に入党することはなかった。彼が集会嫌い、議論嫌いというのもおそらく影響しているはずだが、それにくわえてソ連およびフランス共産党の行動に対する不信が大きかったのではないかと推察される。講義では、戦後のユーゴスラヴィア、ハンガリー、チェコスロヴァキア<sup>スロヴァキア</sup>の状況に言及している（『フーコー論講義』一九八六年一月二十八日）。なお一九六七年以降、ドゥルーズのほとんどすべての本を刊行することになるミニユイ社は、占領下の抵抗運動に関わる本を地下刊行していた出版社で、それを戦後、編集者ジェローム・ランドンが買い取ったものだ。小規模ながらきわめて有名な出版社で

ある。

「《解放》時に二十歳を迎えた世代」に大きなインパクトを与えたのは、ジャン・ポール・サルトルだった。ドゥルーズによれば、吹き抜ける清涼な風のような存在であり、『存在と無』（一九四三年）は哲学を語る言葉を決定的に刷新した。晩年のドゥルーズは、「私にしてみれば、決して失われることのないサルトルの新しさ、永遠の新しさがある」ともいう。戦時下でサルトルの戯曲『蠅』が上演されることが、一種の「抵抗行為」を意味していたのも自明のことだった。キルケゴールやニーチェと同様に、大学教授という公職についていない、制度外の人であるというのも重要だっただろう。サルトルが一九六四年にノーベル賞受賞を拒絶した直後に、ドゥルーズは「彼は私の師だった」というテキストを執筆するが、そのなかで、戦後まで続くサルトルの存在の大きさについてつぎのように書いている。「《解放》のもたらした混乱と希望のなかで、すべてが発見され、再発見された。カフカ、アメリカ小説、フツサルとハイデガー、マルクス主義とのたえまなき調整、ヌーヴォー・ロマンへの飛躍……。すべてはサルトルを経由した」。美学と哲学と政治を交叉させ、横断的に論じ活動するしかたは、二十世紀のフランス思想に特徴的なスタイルでもある。

ただしトルニエの証言によるなら、戦後まもなくサルトルが「実存主義はヒューマニズムである」と述べたことに対して、彼らの仲間のあいだでは失望が広がったようだ。人間性への信頼や人格の重視といった言葉は、彼らには虚しく白けた響きしかもたらさなかった。いくら声高にヒューマニズムや人格主義を叫んだところで、惨状を止めることはできなかった。破壊の痕跡が残り、その後も別の土地での悲劇が伝わり、新たな国際的緊張がすぐさま高まり、別の争いがはじまってゆく。「ヒューマニズム」という理念への不信心、白々しさの感覚は、六〇年代に隆盛する構造主義にも、六八年前後のニーチェ主義の流行にも、七〇年代以後の構造主義批判にも引き継がれてゆく。

ヒューマニズムとこのこうした距離感は、八〇年代に書かれた映画論とも関連している。「シネマ」によるなら「戦後」の映画は、あまりの惨状をまえにしてなすすべもなく、立ちすくんで見えていることしかできない人間の姿を描いた作品からはじまるとされる。すぐに行動を起こすことができずに固まってしまい、心も麻痺してしまった人物、自分が自分であると思えない人物だ。ドゥルーズは戦争のもたらした外傷を、映画のなかに見ているといってもよいかもしれない。敗戦国であるイタリアのロベルト・ロッセリーニ、そして日本の小津安二郎が、現代的な新しい映画のはじまりを画す特権的な映画作家として位置づけられるのも、その点と関連しているように思われる。

第二次世界大戦の以前／以後で、映画を大きくふたつに分ける『シネマ』——第一巻が戦前、第二巻が戦後とよくいわれるが、じつさに読むとまったくそうなっていない——は、終戦前後とそのあとの時代を、ドゥルーズがどのように診断しているのが、端々にあらわれている本だ。一例として、『シネマ』第十二章を見てみよう。戦後を画する最初の映画が、なぜイタリアで誕生したのか、なぜフランスやドイツではなかったのかをめぐる一節である。彼が理由としてあげるのは、「映画外的」な社会的な要因であり、それこそが「本質的」なのだという。

「なぜフランスとドイツよりも先に、まずイタリアなのか。その理由は本質的なものだが、ただし映画外的なものだろう。ド・ゴールの旗振りのもと、終戦間際のフランスは、戦勝国の完全なる一員になるという、歴史的かつ政治的な野望を抱いていた。そのために《抵抗運動》<sup>レジスタンス</sup>は、たとえば地下活動だったとしても、完璧に組織された正規軍の分遣隊だったことにならなければならなかった。さらにフランス人の生活は、たとえば対立や曖昧さにまみれていたとしても、勝利に寄与したことになる必要があった。これらの条件は、映画のイメージを刷新するには不向きだった。映画のイメージは、伝統的な行動イメージという枠組のなかに留まりつづけ、フランス特有の「夢」に奉仕することになっ

たのだ」。

ここでドゥルーズが指摘するのはつぎのことである。まず、占領下のフランスをめぐる一連の神話が、終戦まえから早々に生みだされていったこと。地下のネットワークでつながる抵抗運動が、中央集権的な政治家ド・ゴールのもと、国や軍隊を中心とする物語へと回収されてゆくこと。敵国に対する勝利に寄与した国民生活という神話がつくられてゆくこと。そして、国民の「行動」によって占領を打ち破り状況を変えたのだという虚像（虚像）がかたちづくられること。フランスも、フランス映画も、こうした「行動」の夢を見ながら、戦後しばらくのあいだまどろんでいた。それを映画的に揺さぶったのが、ヌーヴェル・ヴァーグだった。これがドゥルーズの見立てである。

変動が起こった時期を、ドゥルーズは「イタリアでは一九四八年周辺、フランスでは一九五八年頃、ドイツでは一九六八年頃」と見積もる。「一九五八年」と聞いて、フランス史ですぐに思い浮かぶのは、アルジェリア独立戦争のさなかに起こった政治体制の深刻な危機だ。植民地権益の維持を公然と主張するアルジェリア駐留のフランス軍は、政府の命令を無視して軍事行動をはじめ、内戦が勃発する寸前にまで到った。それをおさめたのが、クーデタまがいの行動を起こした軍にかつぎあげられて、政治の表舞台に再び咲いたシャルル・ド・ゴールである。権威主義的なド・ゴールのもとで五八年に憲法が改定され、フランスは第四共和政から第五共和政へと移行する。そして今度は、そのド・ゴール政権が長期化してゆくことになる。検閲も厳しく、ときに作家や出版人が逮捕され、ミニユイ社もその標的となった。徴兵拒否した映画作家ジャン＝マリイ・ストロープがドイツに亡命したのも五八年であり、彼は十年余り帰国できなかった。さらにフランスの旧植民地の一部であったベトナムでも、激しい戦争と虐殺が起こっていた。

帝国主義と植民地主義の過去をまざまざと突きつけられたフランスは、もう自国について「夢」を

見ることはできなくなっていた。フランスの自己像はひび割れ、崩れ落ちた。ドゥルーズが「彼は私の師だった」で述べるように、「まさに、私たちはもはや抑圧された者ではなく、自分たち自身に批判の眼を向けねばならない者だった」。ヌーヴェル・ヴァーグは、こうした時期に登場したと彼はいう。つまり戦前／戦後という言葉をもちいるにしても、それは第二次世界大戦前後だけではなく、より広い歴史的射程と変化を指しているということである。そしてドゥルーズ自身が執筆を本格化させてゆくのも、この時期以後のことだ（アルジェリア独立は一九六二年）。小説ではすでに一九五〇年代前半に、ベケットやヌーヴォー・ロマンが登場し、新たな作品形式が深い衝撃を与えていた。そうした背景のなかでやって来たのが六八年五月だったのである。

### 「思考のイメージ」の刷新

「旧来のしかたで哲学書を書くことは、まもなく不可能になるだろう」——一九六八年に発表された「ニーチェと思考のイメージ」において、ドゥルーズは「科学、絵画、彫刻、音楽、文学」において「革命」が生じているように、哲学においても革命を模索しなければならないと述べる。この革命は、もちろん内容にも、表現形式にも及ぶ。小説家ばかりでなく、思想家や批評家も知の革命をみずからのフィールドで実行に移してゆく。それ以前の思想書や批評書とは、思考のスタイルが決定的に別のもとなったのである。

一九六二年に発表された『ニーチェと哲学』を皮切りに、ドゥルーズは次々に著作を刊行してゆく。ひとつは、哲学者や小説家をめぐるモノグラフィであり、『カントの批判哲学』（一九六三年）、『ブルーストとシーニュ』（一九六四年）、『ベルクソニズム』（一九六六年）、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』